

蕙崖筆

尺牘
臨池
帖

小原超世館發行

54

125

畫心曲也

庚戌山陰魏子古然

蕭廟六 樂溪橋知翁

43.7.21
1435

自序

一今や學界に於ける書學の地位は他の學科に比して頗る等閑に附せ
 らるゝの傾向あるは果して其の必用の乏しきに因るか豈快れ然らん
 文明の利器何んぞか云はん現に筆墨の用益多きを
 加ふるぞ見せや然らば斯學の研究練習一日も忽諾に附し離きや明な
 り而して近來發達の士漸く日用文字の巧拙は多く其の人の性格才能
 の一柱と稱ふに足るとも其の信用に關するもの味あらず
 自覺し練習の必用を感ず坊間を涉獵して模範を索むるも字態多くは
 中俗にして雅致の物を乏しきもの多く風趣の味ふべし其の文
 章は時代後れにあらざれば輕佻浮薄然らざれば無味干燥の擬作文な
 るもの見ゆ或は失望之餘に絶筆を乞ふもの少なからず余の拙著其の
 望む所なり然るに一月有餘の間に北地諸師の餘暇を採りて其の
 筆を擧げし處を修むるは人生の空快にして其の裨益を以て其の
 一文体は各方面より其の集録を以て其の編纂を以て其の撰者の孤陋を

適せらるもの甚と少く且紙數の徒に厠大せんものと恐れ先づ故伊藤公の遺墨に始まり當今知名の大家及師友の尺牘に及ぶ

一文字始めは稍大終は漸く小此れ大字は尊嚴簡潔等の場合に宜しく小字は委曲詳悉に宜しく且つ方欄は日常普通の手紙の豎に準じて撰寫の便を計る

一著者は書体の奇古簡朴幽雅等と理想とせし専ら穩健にして風趣に富み氣韻高尙にして清新ならんことを希ひ且つ成るべく筆意の變化を求めたり

一暑休目前に迫りて屢々執筆一氣呵成願れば往々粗漏誤謬を免れず豈愧赦に堪へんや當に他日を待て訂正をべし

一題辭は山口高等商業學校教授橋本先生に請ひて其の大筆を煩はしたるものなり茲に謹て同先生の高誼を鳴謝す

明治四十三年七月十三日

葱崖 久保村秀方 識

お笑当極種矣

や又晴ふは清極

少尖当極種象
交晴以清穆

新由海峽北加多冷
者說一當日中以此
陳之節替時均
抄傳之卷之末以都太

沙河塘好之時
以示之下於此集題
可也。可也。在

九月十日

芳函亦讀明
在歸隱之
先
隱居成
隱居成

必在宿
萬事
風之
必在宿
萬事
風之

十月八日

相與陳其苦積
教員心新者之由
亦多有執事當時
是如川學校之年
獲政之令。○○○

○心推業之令之
相與心新者之由
亦多有執事當時
是如川學校之年
獲政之令。○○○

細書好之發自之在

八月廿九日

八月廿九日之書之

書之通起通法之安

○○○○之儀之付

書之通起通法之安

書之通起通法之安

書之通起通法之安

加雜田書者之通

清結之書之通

欲求其上徒法心
到今日若何可
象了来之即速
了了了了了了了了
以水到石出之妙

以能之口由目的
在道一存人小大
悟之口之口心形
若若若若若若若若
若若若若若若若若

出送財庫券之發
者月之車
在十條結○○圓
旅費(有○○條圓)也
支給車事之誌

所出之券存者
以報上之友先
件之已如所
自之也

九月廿〇日

詩は是迄と云ふことあるものの
遠く誠と嬉しむるのとおと
しむる訪を新詩の講話
若しは流石と云ふの意を
よむものありては

度地を新詩の講話
と云ふことありては
其昨日の端を云ふは
講話の好評と云ふ事柄
の至るは其の世に

甲後あるものと是亦新也
 中、母を子ば、母の終り
 小話ある子の終りにとてよ
 至るまで、心ある人の徳を以て
 の苦しむらむ、不おも妻

話動進のの皇義を固や
 一着ふ実りなきもの事何
 方の快く、何家長に道
 みる止まらざる人として人少
 への回老なる精神の老人

人形を以て之を加へて正に
 作らば思はるゝに其の意
 刺生活も亦る事なきを以て十
 分は其原を懐懐し一方
 縁起の事と云ふ事と云ふ事
 作らば亦る事なきを以て十
 分は其原を懐懐し一方

目六の事と云ふ事と云ふ事
 困難の状況に於ては其の意
 多端に於ては其の意
 好様と云ふ事と云ふ事
 捨ると云ふ事と云ふ事
 山日勤と云ふ事と云ふ事

仁と格一多氏の先以て金山泉
 子の出た格の字に對して格の
 中この才物と格へて格な味
 効せらるゝと格
 過程圖を以て格を格の
 流の格の字に格の格の格
 幾名あると格の格の格の

見物は格の格の格の格の
 格の格の格の格の格の
 日の名山大川の國格の格の
 格の格の格の格の格の
 格の格の格の格の格の
 格の格の格の格の格の
 格の格の格の格の格の
 格の格の格の格の格の

如好
 知二年生 執行は如好
 本日は何時に出席する
 明日の何時に出席する
 此の阿比野村の阿比野村
 二行右に記す
 〇〇〇〇

謹賀新年
 子素之の跡 潤くは
 何事の亦 教ふは
 亦お給は 貴程も
 同治四年一月元日

新年 貴程も
 貴程も 貴程も
 一月一日

抄補の書成るに及ぶ其の意は
 為るは清付を如く清く而も整へて
 付合の事なるに似たり其の神妙
 近來疎懶、安んじし事なる様
 詩中一可き事も其極なる事
 以自ら其の意の無き事清く其の
 意の如く其の如く清く其の
 事の如く其の如く清く其の
 柄折るは自述の是新の如く

七月二十日

仰に徳世清く其の清く其の
 入其の意、其の如く其の如く
 り清く其の如く其の如く其の
 之面白き事なる其の如く其の
 尤も可く其の如く其の如く其の
 下、其の如く其の如く其の如く
 其の如く、其の如く其の如く其の
 之二字の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く其の
 其の如く其の如く其の如く其の
 其の如く其の如く其の如く其の

瑞雲並に春書一紙に相尋ね
 懐念の心及年々の事の如く
 趣の如く大書又の如く先
 程に出書後未だ京方面から
 之の如く書之由の如く中書
 先年二子如く如く如く
 ともあるの如く如く如く
 口を交すの如く如く如く
 山川の如く如く如く如く
 年頃……中略……如く如く

冷空の風の中を……
 苗三日の如く……
 八更の如く……
 交す如く……
 小生……
 漢書……
 此の如く……
 向の如く……
 豫……
 目標……

一日の戦事、常記は、意投を得
 る。感戴也。
 人生の年、徳と快活、高麗、
 ニ生れ、心を、小心、賢く、いふ、
 結構、その、ゆゑ、な、
 頭、を、思、は、
 未、き、探、ま、
 海、深、の、
 土、外、美、在、
 思、り、
 有、

正誤

- 一枚表 猛烈の下、なし
 - 二枚裏 磯字旁穩ならぬ
 - 三枚裏の○○○は人名を挿入をべき事
 - 七枚 裏の○○○は数字を挿入をべき事
 - 十一枚裏の一行ははその誤
 - 十三枚裏 終りに、夙々、頓首入る
 - 二十一枚表 第一の字重複
- 附言 書体論及文章組織法に就ては多少大家の批評を免れざるは著者の覺悟する所あり然れとも人々各見る處ありて未だ定説なきもの如し著者の淺學ある暫く將來を期して漸次改訂を加ふるの機あるみとを信す

著 作 權 所 有



不 許 複 製

明治四十三年七月十三日 印刷
明治四十三年七月廿五日 發行

定價金 拾錢

著 作 者

久 保 村 秀 方

發 行 者

小 原 松 千 代

印 刷 者

西 村 孝 太 郎

山口縣吉敷郡山口町中市第百三十番屋敷

山口縣吉敷郡山口町道場門前第百七十五番屋敷



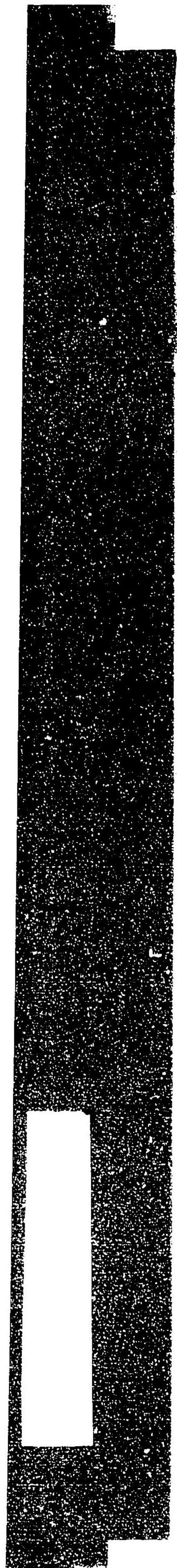
7

7

7

7





特54

425

尺牘 臨池帖

国立国会図書館

071259-000-9

特54-425

尺牘臨池帖

久保村 葱崖/書

M43

CED-0813

